2 問題

《東アジアと倭》

次の**A**・**B**の史料を読み，下記の問に答えよ。 (25 点)

A 興死して弟武立つ。自ら使持節都督倭・百済・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓七国諸軍事安東大将軍倭国王と称す。

順帝の昇明二年，使を遣して上表をして曰(いわ)く，「封国は偏遠にして，藩を外に作(な)す。(中略)東は毛人(もうじん)を征すること五十五国，西は衆夷を服すること六十六国，渡りて海北を平(たいら)ぐること九十五国。(中略)」と。詔して[問1]武を使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事安東大将軍倭王に除す。

注)「上表」＝君主に文書を奉ること。　「除す」＝任命する。

B 大業(たいぎょう)三年，其の王，多利思比孤(たりしひこ)，使を遣わして朝貢す。(中略) 其の国書に曰く，「[問2]日出(い)づる処の天子，書を日没する処の天子に致す，恙無(つつがな)きや，云々(うんぬん)」と。帝，之を覧(み)て悦(よろこ)ばず，鴻臚卿(こうろ)に謂(い)いて曰く，「蛮夷(ばんい)の書，無礼なる者有り，復(ま)た以て聞する勿(なか)れ」と。

明年，上(しょう)，文林郎裴清を遣して倭国に使せしむ。

注)「恙無きや」＝お変わりありませんか。　「鴻臚卿」＝外交事務担当官。

「上」＝「帝」と同じ。　「文林郎」＝官職の一種。

問 1 史料**A**は 5 世紀に倭王「武」が中国の南朝に朝貢したという内容の記事である。この頃には「武」を初めとする倭の五王が相次いで南朝に朝貢した。倭の五王が南朝に朝貢した目的について，40 字以内で述べよ。(9 点)

問 2 史料**B**について。

(1) 史料**B**は 7 世紀初頭の倭から中国への遣使に関する記事である。この時の外交方針の特徴を 20 字以内で述べよ。(6 点)

(2) 史料**B**中の「帝」が国書の内容を不満としながらも，翌年「裴清」を倭に派遣せざるを得なかったのはなぜか，[留意点①]「帝」が直面していた外交問題に留意しながら，その理由について 60 字以内で説明せよ。但し，解答に当たっては，[留意点②]「帝」とはだれのことなのかもはっきりさせること。(10 点)

ポイント

倭の五王と推古朝における中国への遣使の在り方について説明する論述問題である。字数が短いので，解答は設問で問われている事項に絞り，簡潔にまとめることを意識してほしい。日本の国内状況だけでなく，中国・朝鮮半島の情勢も踏まえて体系的に理解しておこう。

解　答

問 1　中国の権威を背景に，朝鮮半島南部をめぐる外交・軍事上の立場を有利にしようとした。
（40 字）

問 2　(1)　倭は中国皇帝に臣属しない形式をとった。（19 字）
(2)　煬帝は，隋の支配に服属していない高句麗を征討する計画を進めていたため，倭と国交を結び，友好関係を築いておく必要があった。（60 字）

解　法

問 1

思考のプロセス

●問：**倭の五王の朝貢の目的**

倭の五王が中国の南朝に朝貢した目的について説明する**因果説明型**の問題である。目的を問われているので，**5 W 1 H 1 R** の **why・how** を中心に考えていく。

また，史料が提示されている論述問題の場合は，史料にも目を通し，その内容を活用しながらまとめていくとよい。史料**A**によると，倭王「*武*」は，中国皇帝から「*使持節都督…安東大将軍倭王*」に任命されている。中国皇帝からこのような称号を得ることにどのような意味があったのかを考えてみよう。

解答の組立て

朝貢の目的…朝鮮半島での外交・軍事上の立場を有利にする
→そのために，中国の権威を借りようとした

問 2　(1)

思考のプロセス

●問：**7 世紀初頭の倭から中国への遣使**における**外交方針の特徴**

史料**B**については，史料中の「*日出づる処の天子，書を日没する処の天子に致す*」という文言から，**遣隋使**の派遣に関するものであると判断できる。この時の外交方針の特徴についても，この文言から読み取りたい。「*日出づる処の天子*」「*日没する処の天子*」という表現に着目して考えてみよう。

解答の組立て

7 世紀初頭の遣使の外交方針＝中国皇帝に臣属しない形式をとる

(2)

思考のプロセス

- 問：**「帝」が「裴清」を倭に派遣せざるを得なかった理由**
- 留意点：①「帝」が直面していた外交問題に留意すること
  ②「帝」とはだれのことなのかをはっきりさせること

まず，留意点②については，史料**B**が遣隋使に関する史料であることから，「*帝*」が隋の皇帝のことであると判断すれば，人物の特定は可能である。次に留意点①については，遣隋使派遣当時の東アジア情勢について考えてみると，「*帝*」が倭に「*裴清*」，すなわち答礼使裴世清（はいせいせい）を派遣した理由が見えてくるだろう。

解答の組立て

- 史料中の「帝」＝（隋の皇帝）煬帝（ようだい）
- 「帝」が倭に使節を派遣した理由
  隋は支配に服属していない高句麗の征討を計画
  ↓
  倭と国交を結び，友好関係を築いておく必要があった（高句麗を牽制するため）

［ヒントの空欄の解答］　1　遣隋使　　2　隋　　3　高句麗

史　料

A：倭王武の上表文

キーワード「興死して弟武立つ」「順帝の昇明二年，使を遣して上表をして曰く…」

出典『宋書』倭国伝

雄略天皇に比定される倭王武が，478年に南朝の**宋**の皇帝に宛てた上表文で，出典は沈約（しんやく）が完成させた**『宋書』倭国伝**である。『宋書』倭国伝には，5世紀初めから**倭の五王**（**讃・珍・済**（せい）**・興**（こう）**・武**）が南朝に朝貢したことが記されている。

B：遣隋使の派遣

キーワード「日出づる処の天子，書を日没する処の天子に致す」

出典『隋書』倭国伝

遣隋使の派遣に関する史料で，出典は唐代初期に魏徴が撰した**『隋書』倭国伝**である。そこには，『日本書紀』には見られない多くの関係史料が載せられている。

解　説

問 1　■倭の五王の遣使

倭の五王による南宋への朝貢の目的は，倭王が中国の皇帝の権威を借りて，朝鮮半島における地位を確立することにあった。

当時，宋は周辺諸国を朝貢させることで**冊封体制**に組み入れ，その支配権を保障していた。日本は朝鮮半島の**加耶**（**加羅**）と密接な関係にあったが，朝鮮では高句麗が勢力を伸張しており，百済や新羅も加耶への進出を目論んでいたため，倭も朝鮮半島南部での支配権を固めたかったのである。宋への朝貢は 421 年，讃によって開始され，478 年の武に至るまで 10 回にわたって使節が派遣されたことが記録されている。478 年，倭王武は宋の順帝に送った上表文で，倭が「東は蝦夷を 55 国，西は熊襲を 66 国，朝鮮半島では 95 国を平定した」と主張し，これに対して順帝は武を「使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事・安東大将軍倭王」に任命した。こうした称号を得ることが，朝鮮半島に対する倭王の地位の安定につながったのである。

◀ ここもチェック
倭の五王については，讃は仁徳・応神・履中天皇のうちのだれか，珍は反正・仁徳天皇のうちのどちらか，済は允恭天皇，興は安康天皇，武は雄略天皇と推定されている。

問 2　■遣隋使の派遣

隋による中国統一国家の成立（589）は，東アジア情勢に大きな影響をもたらした。例えば，推古朝において**厩戸王**（**聖徳太子**）らが**冠位十二階**や**憲法十七条**を制定するなど，中央集権国家樹立をめざした政策を展開したのは，対隋外交開始を視野に入れたものであったといえる。日本と隋との国交は推古朝に始まるが，推古天皇・厩戸王らはこの外交開始に当たり，倭の五王時代のような朝貢形式を改めて，隋の冊封を受けない立場で交渉を展開しようとしたと考えられている。それは史料**B**の「*日出づる処の天子*」「*日没する処の天子*」や，『日本書紀』608 年の記述の「東の天皇」「西の皇帝」などの言葉に端的に表れている。

ところが，古代東アジアの中国と周辺諸国の関係はいわゆる**冊封体制**にあったから，隋の皇帝**煬帝**が「*蛮夷の書，無礼なる*」ものと激怒したのもうなずけよう。「*無礼*」と怒ったにもかかわらず，翌年遣隋使**小野妹子**が帰国する際に答礼使**裴世清**を派遣してきた煬帝の意図は何であったのか。その理由を朝鮮半島との関係から考えてみよう。

◀ ここもチェック
608 年に裴世清が隋に帰国する際に，高向玄理・旻・南淵請安ら留学生・学問僧がこれに同行し隋に渡った。彼らは中国の先進知識を学んで帰国し，大化改新以後の中央集権国家の形成に当たって大きな役割を果たした。

■ 7 世紀初頭の東アジア情勢

隋の成立は朝鮮半島 3 国にも影響を与えた。百済と新羅が隋に朝貢して冊封を受けたのに対して，高句麗は築城や兵器の修造により防備を固めた。この高句麗の態度に不満を持った煬帝は，小野妹子が国書を持参した 607 年，高句麗遠征の準備中であったといわれる。煬帝が日本の態度に不快感をあらわにしながらも答礼使を派遣したのは，高句麗の服属を目標とする彼に，日本と国交を樹立し，高句麗を牽制しておきたいという意図があったためと考えられる。